ミライを拾う

塚田源（もと）秀（ひで）

その頃の私たちは、中年期に誰にでも訪れる倦怠期と言えばいいのか、三人の間でもそういう関係が喩として的確かどうかわからないけれど、言い表すとしたらそんな言葉が一番ふさわしいように思えた。

私は、かれこれ十数年ほどすこし離れた街で喫茶をやっていて、私の店が入っているビルが取り壊しということになり、その場所を出ざるをえなかった。周辺のテナントを探すも、どれもぱっとするところがなく、五十半ばで毎月家賃を払うことにしんどさもあり、周りに気を遣うことにもばかばかしくなって、もしかしたら自分の家でできないかと頭をよぎった。辺鄙な場所ではあったが、家賃もいらないし、がたがあったものの亡き祖父が建てた築一〇〇年の堂々とした家である。当初、家をさわることに反対していた母だったが、なんとか説き伏せることもでき、改修工事をして古民家カフェとしてオープンした。半年ばかり経っていた。前の店から一緒に働いている真由美さんも、朝一番に近くの道の駅に納品もあって、週の半分は私の家で寝泊りしていろんなケーキを焼いてくれていた。

もうひとりは三つ上の姉で、姉の夫、つまり私の義理の兄が三年前に心筋梗塞で急に亡くなり、どういうわけだか、亡くなって半年も経たずに実家に戻ってきたのである。母もその頃はまだ元気で、嫁ぎ先の義母に申し訳なさと、世間体が悪いと口にしていていたが、やはり実の娘ということもあって、いやいやでも受け入れた。母と一緒に住んでいた私でさえ、あまり気持ちよく受け入れる気分ではなかった。仏壇に義理の兄の遺影があるというのも違和感があった。半面、母に軽い認知症があったので介護に協力してくれることを期待していた。嫁ぎ先の親戚から毎年来ていた年賀状もパタッと止まってしまった。姉が

思うには、遺産相続をはじめとする整理も終え、息子、娘も就職して、ひと段落といったところで、第二の人生でも歩もうということなのか。今も養護学校に教員として働いている。それに、私が独り身だということも大きかったに違いない。荷物の移動の日、引越し便の大きなトラックが来て、大きな箪笥が数棹、家に運ばれていった。予想外だったのは、姉の車からトイプードル一匹が降りてきたことである。よりによって、雄である。私の家でも小町という名の雌の同種を飼っているのを姉は知っていたわけで、あえて当日まで、黙っていたのだろう。

そして母は一年前に亡くなり、三人での暮らしが始まった。家はだだっ広く、表の玄関の土間や座敷、床の間、台所をお店として使って、それ以外は住居部分としてあるわけだが、それでも十くらいの部屋はあって、プライバシーが守られるというより、多くの部屋の使い道がなくただ物置場と化している有様だった。最初の頃は改修工事やお店のオープンもあって、忙しく何事にも新鮮で笑いがあった。真由美さんは私より五つほど下で、朝早くから働いてくれていた。主人とはとうに別れていた。心臓病を持った息子も大きくなり、もう何でも一人でできるからという彼の言葉で、彼女の彼に充てた時間を私のお店に注いでくれた。そんな私との付き合いももう十年近くになるのだが、私の大まかな性格がここまで続けられていると彼女は言う。きっちりとしたお給与もいらないと言った。その理由に、休みたいときに休めない、雇う側雇われる側という上下の関係も性に合わないとの事だ。私の母の介護のときでさえ、店の傍ら、母を看ていてくれていた。たまたまだったのだが、家で息をひきとる際も、私も姉も留守で真由美さん一人だったのである。

新鮮で笑いの場として花を咲かせるのは、閉店後の夕食のときである。レトルトや冷凍商品などを使わない主義の真由美さんがほぼ毎晩腕をふるってくれた。その時間に姉も仕事から帰ってきて、テーブルを囲む。もちろん、店の古材テーブルだ。ロールスクリーンを下ろし、銅作家が作った吊り下げの照明の下、「今日、お客さんどうだった」と姉から

の問いかけではじまり、話に花が咲き、笑いが絶えなかった。

「チャレンジだったわね。きっと、祖父や父も喜んでいると思う。大きいばっかでほとんど使いみちのない古い家を再生してくれたんだもの」

古材のテーブルを撫でながら、天井の太い欅の柱を見た。

「今日も、古民家に関心あるお客が来て、欅の太さにびっくりしてた。それにしてもネットの力はすごいね。まったく広告を打ってないけど、遠方からも探してよく来られるよな」

あつあつの水餃子を口にし、続けてタコとホタテの炊き込みご飯をほおばって、ついむせ込んでしまう。

「せっかちなんだから、もう。あせらないで、健史さん。誰も取りはしないんだから」

真由美さんが、箸をもった手で私の背中を叩く。

「わかってる。どれも絶品でさ、衝動的に口に入っちゃうんだ。餃子の肉汁や食感がたまんないね。それにタコとホタテの相性といったら、言葉にならないよ」

「弟の言うのもわかるわ。とっても美味しいし愛情がこもってる。ごめんなさいね、真由美さん、何も手伝わなくて。もう頼ってばっかで」

「いいんです、食べてもらうのが好きなんですから。餃子の皮は、粉から作ったの。もちもちしてるでしょ。肉はミンチじゃなくて、いい豚バラを刻んで包んだの」

真由美さんは欠伸しながら手で口をかくした。

「眠たい？」と私が聞くと、彼女はうんと頷きもう一度欠伸をした。

「朝の五時起きでしょ。眠たいに決まってるわよ。真由美さん、先にお風呂入って。ここの後片付けは私がやっておくから」

姉がそう言うと、それじゃ、おやすみなさいと真由美さんは席を立ち、手を振った。

そういう新鮮で刺激的な日々がずっと続くわけがないとわかりながらも、来るお客が店に新しい風を運んできてくれる。いくらかの緊張感も残っていたし、これからどういう店作りが必要か、メニューはどうかなどと考えることも刺激的でまではいかないにしても、充実感はあった。しかし、とふと思う。それも毎日毎日同じことを繰り返しやり続けていたことに対して、今後もこのままやっていいのか、店や仕事という範疇から外れた視点で問いかけてくる、もう一人の自分がいる。それは、年齢からくるものかもしれないし、いまだ独り身ということなのか。こんなことを考えてしまうのは、梅雨のはしりで、雨が多いせいなのかもしれない。窓から見える樹木の青葉を蕭蕭（しょうしょう）と濡らす光景はどこか寂しいものがある。とくに仕事場と住まいが同じ屋根の下にあるが故のことなのか、この頃、物や精神的なことにおいて公私の境界がなくなってしまって、また出掛けるということがなかなか出来なくなり、外との接点が持てていないということも原因のひとつかもしれない。とくにここ最近、出不精になってきているのは確かだ。そんな私を見かねて、真由美さんが市の広報誌に掲載されていた「読書会」の講座をすすめてくれた。私が暇をもてあます際に本をよく読んでいるということもあっての事だ。この会は昨今の小説を課題に合評して、コミュニケーションを図るというもので、もう既に二回参加している。気分転換としても、有意義な時間を過ごさせてくれている。

真由美さんですら、これから先何年も毎朝早く起きて、ずっとケーキ焼いているのかしらと思うと、ゾッとすると言う。心臓病の子を育て上げ、私の母の介護を終え、尽くすということに生きがいを感じている彼女にとっていささか物足りなさを感じているのだろうか。姉はと言えば、仕事以外には、これといった事をするわけでもなく、休みの日にはお昼頃まで寝ていた。孫の世話（長男は結婚して子供もいる）や、高校時代の友達や娘と一緒に若手の男性の韓国グループのコンサートに出かけたりしていた。連れてきたトイプードルの名前、シャイニーもそのグループ名から付けたようだ。どうみても、具体的な第二

の人生のプランがあるようには見えなかった。

ほぼ毎夕、食卓を囲むわけだが、いつも話題があるわけでもなかった。そんなことはどこの家でもよくあることだし、どうってことはない。ただ、新鮮さと笑いが常であっただけにそのギャップは大きく、沈黙の時間がある度に「なにか面白いことないの？」と真由美さんが私につっけんどんに聞いてくる。夫婦でなくても、ずっと顔を合わせていたら嫌になる時もあり、何もないと答えるだけだった。姉が、「お店、今日どうでした？」とフォローするが、私と真由美さんは「別に……」と合わせるように首を振る。窓をたたく雨音がよく聞える。「では、寝ます」と真由美さんは席を立った。

そんな鬱々とした日々が続く頃に、ちょっとした事が起こった。

夜中の二時ぐらいだったように思う。家裏の川の辺りで甲高い鳴き声がした。眠りの浅かった私ははっと目が覚めた。子犬に違いない。きっと、お寺の方から流れてきたのだ。一瞬、あの子犬のことが頭をよぎった。その時も助けてというぐらいの必死さだった。

一ヵ月くらい前のことだった。鎮守の森とまでは立派ではないが、この辺りでは有名な古刹が家の近くにある。寺の裏には鬱蒼とした小さな森があり、小町とシャイニーの散歩ルートとしてよくその森を囲む小路を利用していた。周りは田んぼが広がり、見渡せば遠く山々が連なっているのが見えた。陽が東の山から見えた頃、犬たちも私もいつも気持ちよくそこを通った。その日の朝も同じようにその小路を入ろうとした時、どこからかキャッキャッと子犬の鳴くような声がした。それも強く必死で訴えるような声だった。周りには何もいない。二匹は何かを感じ身構えた体勢をつくった。どうやら、森と小路の境界になっている水路に落ちたに違いない。深さは一メートルくらいあるだろうか、川べりには鬱蒼とした草が生えており、整備していない森のほうから折れた竹などが蔓（つる）とからまって縦横無尽に被さっていた。ごみもあって、お世辞にもきれいな水路とはいえない。落ち

ないように覗き込みながら縁沿いに歩をすすめると、茶色い頭のようなものが見えた。いた！　頭だけだして、ぶるぶる震えながら折れた竹にしがみついていた。かろうじて水路には川の流れもゆるやかで水量も浅かった。二匹のプードルを近くにあった支柱にくくりつけ、助ける手段にでた。なにも道具もないので、腹ばいになり片方の手で頑丈なペンペン草をぐっとつかみ、大きく身を乗り出しもう片方の腕を伸ばした。なんとか首ねっこをつかみ引き上げた。水に浸かっていたから、とうぜん全身は冷え切っていて、震えもすごかった。生まれて一ヵ月くらいになるくらいだろうか、全身が茶系で鼻と耳が黒く、昔ながらの雑種犬の趣だった。さて、どうしようかと思っていたら、プードルが途端に吠えだした。どこから現れたのか、白と茶色の二匹の大きな犬が目の前に来て吠えはじめた。親もしくは仲間だろうと思い、連れて帰って保護するか迷ったが、置いてきてしまった。

その後、気になって何度もその周辺を探してみたが、その子犬はいなかった。そんなことはないだろうと思いつつも、もしかしたら、また川に流されてくるのではないかという嫌な予感もあって、周辺の川を気にして見ていた。しばらくして、家の前の川で、白骨化していない胎児のような子犬のような原形を留めないものがあった。手足も身体全体が、鶏肉の皮のようなふやけた感じだった。水量が少なく、藻にからまっている。あの子犬だろうか。もうあれから二週間くらいは経っている。よりによって、家の前で留まっているとは。私に対するあてつけか。やはりあの子犬だろうか。早く流れていけばいいのにと思った。

そして今も、川の中で溺れているに違いない。子犬の声を聞くや、親なのだろうか近くの野良犬たちが吠えはじめ、小町もシャイニーも続いて鳴き、近隣の家の中で飼っている犬たちも一斉に吠えている。辺りが犬たちの大合唱の場になってきた。まずい、助けに行かないと。掛け布団を蹴り上げて、トランクスとTシャツのまま部屋を出ると、隣の部屋

から真由美さんも出てきて、「目が覚めちゃった。裏の川辺りね、もしかしたらあの子犬かも」と言った。子犬を助けることはもちろんだが、きっと犬たちの大合唱で多くの人が起こされているに違いない。私は階段を急いで降りて、懐中電灯を手にしてスリッパ履きで外に出た。梅雨で霧雨が降ってもやっとしていた。裏の川に行くためには、ぐるっと家の周りを経て隣の家との境界線でもある畦道のような小路を通らなければならない。草木がぼうぼうでとくにこの季節、日中でも歩くことを躊躇するのに、暗闇のせいもあって、不思議と何のためらいもなく突き進むことができた。子犬の突き刺すような声を中心に周りの犬声が被ってくる。

濡れた草木が腕や脚にひっついてくるが、かまわず走った。ようやく川に出ることができた。鳴き声はやはりこの辺りだ。川に懐中電灯を向けると、何かが動いている。川に入り近づいていくと、川上のほうへ逃げていく姿らしきものが見えたが、暗くてよく見えない。川の流れもゆるやかで、深くもないこともあって、かなりの速さで上の方へ逃げていく。泥に足をとられ、スリッパも脱ぎ捨てて裸足で追いかけていくと、あの時拾いあげた場所ぐらいまで来てしまった。近づいて電灯を向けると、やはり子犬のようだ。折れた竹などに阻まれてその子犬は暴れに暴れた。キャッの声にガボッという水を飲んでいるような声も重なって、手を出すと噛み付いてくる。小さいので歯も尖がって突き刺すような痛さが走った。なんとか首ねっこをつかんで、上へやることができた。何匹かの野犬の鳴き声が近くなってきた、おそらくこちらの様子を窺っているのだろう。しかし辺りは外灯もなく彼らの姿は見えなかった。噛まれないように首ねっこをしっかりつかみ一気に家まで走った。

家に戻ると真由美さんが出迎えていて、子犬を渡した。キュンキュンと小さな声で身体を震わせて鳴いているものの、元気そうだった。気がつくと、辺りは何もなかったように夜の静けさに包まれていた。

「あの子犬だった？」
「たぶん」
真由美さんが早く温めないとと言って、浴室でシャワーかけると、その子犬は暴れることもなくじっとしていて、ぶるぶる震えるばかりだった。その後、彼女がドライヤーをかけていると、少し落ち着いたのか、フウと息を吐き、安堵した鳴き声を出したと思いきや、ごぼっごぼっと苦しそうに水を吐いた。私が背中を擦ってやると更に二度三度水を吐いた。スマートフォンで撮っておいた一ヵ月前のあの子犬と見比べてみた。全身の茶系や、耳や鼻、口のまわり、そして目の上にある円形の黒さも同じのようだ。身体もやや大きくなっているように思えた。
「似てる？　見せて」
彼女にスマートフォンの画面を向けた。
「色といい大きさといい、おそらく間違いないと思うけど……」
「そうね、顔立ちがそっくりだわ。きっとこの子よ。だったら川に流れていたあの子犬は？」
彼女は子犬を抱き上げた。されるがままの子犬は、じっと上目遣いに私たち二人を見ていた。
「きっと兄弟だったろうな。寺の住職も数匹産まれていたと言ってたし」
トイレで起きてきた姉が寝ぼけまなこで「どうかしたの？」と近寄ってきて、真由美さんが事情を話すと、「へえ、全然聞えなかった」と驚きを隠せない様子で首を何度も横に振った。以前、甥が言っていたことを思い出した。姉家族が飛行機に乗っていた時、エンジントラブルで機が大きく揺れ、機内はパニック状態だったのに、姉は到着するまで何事なくずっと寝続けていたと。
夜が明けて、検査してもらうため、家から一番近いＡ動物病院へ連れて行った。川に溺

れていた事情を話したら、まず血液と便を採りましょうと、検査台にその子を載せ、さらにエコーもやってもらった。お腹に川の水が残り、腸に虫が湧き、耳の奥にダニがいっぱいついていたが、「産まれて三ヵ月くらいかな、女の子です。うん、健康ですね、大丈夫。足を見てください、大きくなりますよ」と先生は、体には不釣合いの大きい前足を持ち上げた。「虫下しの薬と缶詰をだしておきますね。運命が開けて良かったな」と子犬の目を覗き込んだ。傍にいた女性スタッフは、上目遣いした表情を見て「良かったね。拾いあげられて」と何度も頭をなでた。

ほっとした私は、受付近くにある里親募集の掲示版に貼らせてもらっていいかとお願いした。野良の子犬だし貰い手もまずいないだろうなと遠慮ぎみに言ったつもりが、「この子だったら、一週間も経たないうちに、すぐ里親が見つかりますよ」と先生が言った。

「えっ」意外な言葉に驚きを隠せなかった。「野良の子ですよ……」と私が言いかけたが、「今、雑種の犬って珍しくて、逆に人気があるくらいでね。この子くらいだったら、きっと貰い手がすぐ見つかります。この子がもう少し大きかったら、難しいかもしれませんが。運命が開けた子ですよ」

私は、里親がだめなら、飼うか、公の動物保護管理センターに持っていくしかないと思っていたので、安堵した。

受付で会計する際に、ワンちゃんの名前は？　と聞かれた。不意をつかれた感じで、咄嗟に「リバちゃん」と答えると、隣にいた真由美さんはリバちゃんって何？　と私の顔を窺った。「二回とも川で溺れていたから、その川からリバーと思いついたんだ。仮の名前だから」と言うと、「まあ、そうね」と笑った。

外に出て、私は立ち止まった。真由美さんがどうしたのと振り向くと、「先生が、運命が開けたと言ったよね。その時、開（かい）っていい名前だなって思ったけど……。女の子だし、たしか携帯電話のＣＭに出ている白い犬もカイって名前だったよなと思って」

「それよりも、里親募集の案内を作らないと」

小町に使っていた使い古しのケージをリバちゃんに与え、缶詰の餌をあげた。美味しく食べるのだが、何度か泡まじりものをもどした。川に溺れていたこともあり、今まではネズミやミミズなどを食べていたから食の環境も違うので、もう少し様子を見ることにした。殆ど吠えなかった。川に溺れた際の必死な鳴き声を出した子犬とは思えなかった。ただ、上目遣いの視線でじっとこちらを見ている。白目が大きく半月型になっていて、その上にブラックホールのような茶と黒の吸い込まれる眼孔が載っている。この感情表現をクジラ目と言うらしい。一見かわいらしく見えるのだが、不安やストレスを感じているようだ。小町もシャイニーにも、ときおりチラッと見せることもある。ひげにしても、長かった。犬種によって様々だが、やはり極端に長かった。野良という環境下で生きていかざるをえない宿命の名残のように思えた。「それにしても、かわいいな」と私が言うと「動物の赤ちゃんは、みんなかわいいのよ。人間だってそうでしょ。どんな状況や場合でも、助けてもらえることが前提になっているのよ」真由美さんは上から目線で言う。

姉はといえば、きっとシェパードの犬種よとスマートフォンでその画像を繰り返し見ながら、興奮気味に話している。「全体的な雰囲気や茶と黒の配色も同じだし、目の上のあるポチッとあるところが決め手よ」と親指と人差し指で小さなリングを作り、自分の目の上に置いた。

「どこにでもいる雑種だと思うよ。何代か前にシェパードの血が入っている可能性はあるかもしれないけどね」

私は冷静に言った。

店の営業中も時間さえあればリバちゃんの世話をして、Ａ４サイズの写真入りの里親案内も作った。「健康状態は良好」と。私がどの写真を載せようかと数枚のプリントから選

んでいると、姉が仕事から帰って、顔を覗かせた。どれもかわいく撮れているわねと言って、その中から、「これが好きだわ」と手にした。リバちゃんが遠い空の向こうを見ている写真だった。

「澄んだ目で未来を見ているようで、かわいい」

「未来か――そうだ。いや、カタカナでミライがいい」

と私が少し興奮気味に言うと、姉はすぐに悟って「ミライちゃんね」と少し間をおき、いいわねと言った。

早速、店の前の塀に里親案内を貼り、近くの動物病院にもお願いして廻った。

二、三日して、泡状の嘔吐が多くなり、ぐたっと横になっていることが多かった。餌をやってもすぐもどし、便もほとんどなかった。A病院へ連れて行ったが、横隔膜にまだ水が残っているようなことを言ったので、他の動物病院に連れて行くことにした。ずっといろんな犬や猫を飼っていると、それぞれの動物病院の特徴があって、病気の性質や度合いによって、得手不得手なものがある。人の病院なら、なおさらである。とにかく私なりの判断ではあるが、今回はそうした方がいいと思った。次は、小町のかかりつけのB病院である。

先生は開口一番、「雑種を診るのってはじめてです」と奇異を見るように言った。たしかに先生は若いが、昔、その辺にごろごろいた野良犬の存在すら知らない世代なのか。

まず、血液検査とレントゲンを撮ってもらった。血液検査での異常は見られず、レントゲン写真を見て、うーんと首をかしげ腕組みをした。本来ない場所に、ぼやっとした白い影が写っているようなことを言った。医学書を持ちだしてきて、該当する箇所を探しだして子犬特有の腫瘍があるのかもしれないとも言った。ここではその詳しい検査や手術もできないので他県にある二つの病院をすすめられた。ひとつは獣医学部のある大学病院で、病院の紹介からしか受け付けてくれないという。検査だけで二週間待ちとのことであった。

もうひとつは個人病院で、大学病院よりさらに遠く、病気にもよるが高額負担の可能性が大きいと言った。

「外は明るいけど、もう七時過ぎているのね」

真由美さんの胸にミライちゃんが目を閉じて張り付いていた。

「もう一箇所、廻ろ」

車中でいい病院がないか、ネットで調べた。ここから下の道で一時間くらいのところに心臓病などの高度医療手術も手がけていて、設備が充実しているところがあった。

「今から行って、間に合うの？」

「八時までだろ。高速を使えばなんとかなるよ」

いつになくアクセルを思いっきり踏んだ。次々に目の前に現れる赤いテールランプが瞬く間に後ろに引っ込んでいった。C動物病院には閉院時間の五分前に着いた。

ひと通り事情を話すと、「この子、野良犬じゃないかもしれないですね」とF先生は言った。「このぐらいの大きさだと、野良の気質は全然ちがいますからね。もっと激しいですから。多分、悪質なブリーダーが商品にならないので、捨てたのかも知れません」

「そんなこと、あるんですか」

「よくあります」

再びレントゲンを撮ってもらった。

「この白い影は食道で、肺あたりところで大きく拡張して、何かが巻きついているように見えます。おそらくですが、胎児の時に存在する動脈の血管が、普通なら出生と伴に無くなるのですが、それが残っていて、食道を圧迫しているのではないかと。だから嘔吐する症状が出ると思うんですが」

「で、どうすればいいんですか」

私は言った。

「この子の今の状態や体重からだと、手術はもちろんですが、検査も難しいです。全身麻酔すら危険な状態です。まず体力を回復させないといけません。リキッド状の栄養食を渡しておきますから、もうすこし様子をみるしかないですね」

「この子の体力が持ちますか」

真由美さんは先生にせまった。

「絶対、大丈夫とは言えません」

先生は頭を振った。

もう外はすっかり暗くなっていて、病院の外灯も消されていた。私たちはふうっと息をついた。時計をみれば、もう九時をはるかに過ぎていた。そういえば、丸一日、動物病院まわりをしていて、朝から何にも食べていなかった。コンビニでおにぎりとお茶を買って、下の道をゆっくり走った。不思議と疲れは感じなかった。病気の動物とはいえ、これだけ一所懸命になっていることって、久しくなかったように思う。それも野良の犬に。仕事とは、どこか違って無私の心というものなのだろうか。ふと振り返ると、子供の頃から私の傍にはいつも犬がいたように思う。母が動物好きということもあって、どれだけの犬を飼ってきたのだろう、一匹一匹顔と名前を思い返してみる。六、七匹は飼っていたか。昔は犬を買うということはなくて、知り合いから産まれた子犬を譲ってもらうか、当時はよく見かけた野良犬を拾ってくるかの二つだった。どういうわけだか、子供の頃に飼っていた犬のことをより鮮明に覚えていた。子供の時分は、味噌汁ご飯だけで、雪の降る凍てつく日もかんかん照りの暑い日も外の粗末な小屋で飼ってきた。寒くて凍え死にした犬もいた。それはおそらく自分の家だけではなく、田舎では普通であった。動物病院は少なからずあったのかもしれないが、病気や怪我をしても連れて行くという発想すらなかった。でももうすこし、子供ながらに何かできたこともあったのではないかと悔やまれる。

「何か考えごとしているようだけど、ミライちゃんのこと、しっかりと考えてる？」

「もちろん、考えているよ」

私は彼女の膝に横になっているミライちゃんの頭を撫でた。

「明日の朝、電話で確認した上での話だけど、例の個人のD動物病院へ行こうと思うんだ」

「今日は定休日と重なってよかったけど、店はどうするの、休むのね」

「家事都合により、臨時休業かな」

「遠いの？」

「片道、三、四時間かな。二山越さないと行けないところなんだ」

行くことに決まった。臨時休業の看板を出して、車に乗り込もうしたら、こういう時に限って、お客というのは必ず来るものだ。事情を話して、帰ってもらった。

山を越えるというのは、距離以上に遠く感じる。そして山を走る道はわかりやすいが、ちょっと曲がる道を間違えてしまうと、とんでもないところに出てしまう。今回も、一度曲がる道を間違えて、三十分ほどロスしたが、なんとか診療時間内にたどり着けた。駐車場には、多くの県外ナンバーの車があった。

担当のM先生は四十代くらいの熊のような人だった。ミライちゃんの症状から、昨日の病院でのやりとりを話している間、M先生はじっと耳を傾けてくれていた。ここでもレントゲン写真を撮った。

「これは、難しい病名なんですが、右大動脈弓遺残症だと思われます。ほぼ間違いはないでしょう。本来は左側の大動脈弓が残るところを、右の大動脈弓が残る奇形での病名です。位置が変わることによって、その動脈弓が食道を圧迫して食道を狭窄していて、ここに拡張が見られるのです。ミライちゃんの場合、それが重度であって、吐出の症状が出ているわけです。これを放置してしまうと、誤嚥性肺炎で亡くなる可能性が高いです」

M先生は白い紙に、心臓や食道、右大動脈弓、肺動脈の図を描いて説明してくれた。
「どうすればいいのですか」私は言った。
「手術しかないです。それも一日も早く」
「でも、他の病院では、体力がなくて全身麻酔すら出来ないと……」
「どうしてですか？」
彼は不思議そうに、目を丸くした私らを見た。「できます。全身麻酔はいくらかのリスクはあるのは確かですが、それはどの病気も同じです。しかし、難易度の高い手術だけに、リスクは少なくありません。切断する動脈管策の周りに心臓、肺、大動脈、肺動脈などの重要な臓器があるので、細心の注意が必要となります」
「成功の確率はどれくらいですか？」
すこし間をおいて「七、八割でしょうか。それと、手術代ですね」と言った。
「いくら位かかりますか？」
「四十万円前後の負担になるでしょう」
彼は交互に視線をくれた。そして、真由美さんは私の方を向いた。
「手術をお願いします。それも一日も早く」
「わかりました。手術日の確認をしますので、少々お待ちください」と、奥へ入っていった。
私らに特別な会話はなかった。覚悟を決めたら、あとは天命を待つという心境だった。大金ではあったが、これっぽっちも惜しくはなかった。けちな私であったが、不思議である。むしろ自分で言うのもなんだが、どこか誇らしい気分だった。
きっと彼女もそんな気持ちだったに違いなかった。M先生が戻って、手術の日は三日後、執刀医は当病院の医院長しかできないということであった。彼から手術の際の説明を聞いた。ミライちゃんの最終目標は、口から食事をすることができるということ。それまでい

くつかの段階があってハードルも高いということだった。術後から当面の間、口からの食事はできず、胃ろうをつけて、胃から直接栄養を摂るということ。日に数回、立位の姿勢でやらなければならないということであった。その立位の時間は一時間はやらなければならない。誤嚥性肺炎を防ぐためであるという。ということは、数回の食事で、計五時間の立位の姿勢をつくってやらなければならない。

とにかく手術の成功を祈るばかりで、その後のことはその時考えればいいと思った。そして、ミライちゃんを預けた。受付を終えて、ミライちゃんを抱えたM先生が診察室から出てきて一礼した。大人の熊が子犬を抱いているようで、どこか微笑ましかった。

手術の日の朝、私ら三人はどことなく落ち着かなかった。家で連絡を待った。手術が終るのが二時ごろで、おわり次第、私の携帯へ連絡するとのことだった。とにかくメールだけは頂戴ねと念を押して、姉は勤めに出掛けていった。

午後二時になったが連絡はなかった。三時、四時になっても電話がかかってこなかった。姉も待ちきれず、早退して帰ってきた。店は開けていたが、四時以降はお客がさっぱりだった。お客がいたほうが逆に気がまぎれるのにと、何度も玄関ドアの方を見た。店内のテーブルに三人座るも、じっとしていられず、席を立ってそれぞれ手持ち無沙汰で、何かしていた。それにしても、連絡がこない。とっくに手術は終っていることは確かである。万が一、失敗して命を落とす場合でも、すぐ連絡はしてくれるであろう。そんなことを考えていたら、M先生からの電話だった。

「連絡がおそくなって、すみません。全身麻酔から、なかなか起きてくれなくて心配でしたが、先ほど目を覚ましてくれました。手術はとりあえず成功です。術後、容態が悪化することも考えられますので、この一晩はしっかり診ていきますから」

「ありがとうございます」

自然と頭が下がった。

真由美さんと姉に伝えた。その日は、乾杯した。

退院は一週間後という予定であったが、あと、十日ほど遅れるという連絡があった。少量の餌を口からやった際に、誤嚥性肺炎を起こしたのだ。さらに一週間、延びた。そんな一進一退の日々が何日かつづいた。その間、別々に見舞いにも行った。姉は一人電車で行って、乗り継ぎの間違いで反対向きの電車に乗って逆の方へ向かっていたのだ。駅も少なく、山と田畑だけでの景色も変わらず、気づくのも遅かったのだという。私はと言えば、動物病院向かいのカフェの大通りに面した駐車場で脱輪を起こしてしまった。気長にＪＡＦを待っていたら、どでかいアメリカ製のハマーという車が横に停まった。私と同世代の日に焼けた男だった。「どいつもこいつも、ただ通り過ぎるばっかで、気にかける奴はいないのかよ」と往来する車を見て吐き捨てるように言った。私がすみませんと頭を下げると、「いいよ、いいよ、よくそちらの湖へ行って、そちらの仲間にお世話になっているから」とロープであっという間に引き上げてくれた。「お礼のほうを、せめてお名前と連絡先でも」と言ったら、手を横に振って颯爽と行ってしまった。

「格好いいわね。あの車欲しくなったんじゃない」

真由美さんは私の横腹を肘でつついた。

「それにしても大きい車だなあ。こっちは、格好わるいところ見せちゃったな」

「ミライちゃんを拾ったと思えば、今度は拾われることになったわね」

クスッと笑う。

「拾い拾われだな。人生そういうもんだよ」

ようやく退院の日を迎えた。見舞いに行った時よりはいくぶん元気を取り戻しているようにみえた。首の周りのエリザベスカラーとお腹に取り付けられたチューブが痛々しかっ

た。当面、もしくはこれからずっと胃ろうとしてミライちゃんは生きていかなければならないのだ。女性スタッフが胃ろうでの餌のやり方を教えてくれた。真由美さんは、手馴れた手付きで、とろみ状の肉を湯で溶き、注射器に入れた。そしてそれをチューブに通して、すこしずつ空気を入れないように体内に入れていく。ミライちゃんは気になって胃ろうの箇所に顔を向けるのだが、エリザベスカラーによって身動きできない。女性スタッフが

「手馴れてますね」と感心すると「息子のことで、ずっと病院生活が長かったですから」と真由美さんは手を休めず淡々とやっていく。手先が不器用な私は遠慮して、一歩下がって見ているだけにした。食べずにお腹がふくれるってどんな感覚なのだろう。父が生前、結腸がんで人工肛門を取り付けている姿をふと思い出した。こういうことも、私にだっていつ起こりうるかもしれないと思った。

家では姉がご馳走を作って待っていてくれた。姉の腕を考慮すると精一杯の気持ちが表れていた。まず、空っぽのケージにミライちゃんを入れた。主を待っていたケージは息を吹き返したように生きる箱となった。空のケージほどむなしく無残なものはない。ミライちゃんはいつものように柵の間に顔を埋めようとしたが、エリザベスカラーが邪魔してなかなかできず、上目遣いをした。一ヵ月弱の長い入院だった。

食事中、姉はずっとうつむいてスマートフォンを見ている。

「お姉さん、どうされたんですか？」

真由美さんは、スマートフォンを覗き込んだ。

「やっぱりミライちゃん、シェパードだったのよ。あの病気、シェパードに多い病気なんですって。私の勘、当っていたわ。見て」

「どの犬だっていいよ、この際」

私は呆れるように言った。

「だって、シェパードよ。シェパード。賢くて、飼い主に忠実なのよ」

姉は何かにつけて決め付けるタイプの人間で、更に飽きっぽいときている。最近では栄養ドリンクや充電式の掃除機に凝っていて、マキタの掃除機が各部屋に七台も置かれている。

その夜は酔いが早く回って、すぐ寝てしまった。

ミライちゃんの世話は、真由美さん主導でおこなわれた。まず、日ごとのスケジュール表を作り、餌をやった時間、餌の量、その他の気づいた点などを書き込むものだ。すぐ目に付くよう業務用の冷蔵庫の扉に貼り付けた。「こうすれば、一目瞭然でしょ。誰がやったか、忘れることもないし」と真由美さんはいとも簡単に作ってしまう。「こういうの慣れているの、病院暮らし長かったから」餌の缶詰を開けて一食一食を計ってラップに包んでおいて、日付順にタッパに入れた。

一番大変なことは、やはり胃ろうでの食事である。今まで口から食べられていた行為を、匂いだけはぷんぷんして、口から食べられないというのは、とくに犬という動物にとってはつらい。それを一日五回、後ろ足だけで立たせて片腕でロックして抱きしめ、一方の手で注射器を使ってチューブの中に流動食を注入させて、一時間その体勢をつくっていく。それを三、四時間おきに計五回やっていくのだ。それから排便、排尿の始末をいれると、ほとんど付きっ切りの世話である。

やはり思った以上にしんどい作業だった。エリザベスカラーは患部には触れられないものの、床に落ちているものには口が届く。食べたい一心だけに、ウンチはもちろん、床に敷いたペットシーツさえ食べてしまう。それは、日を追うごとにエスカレートしていった。その際に手を出したものなら、噛まれてしまう。シーツの代わりのタオルにしても同じだった。周囲が原型をとどめずささくれ状になってしまった。とうぜん、嘔吐の際に、ウンチはもちろん、シーツやタオルの残骸も多くあった。これでは、胃ろうの意味がなくなっ

てしまっていた。そのうちひどい誤嚥性肺炎を起こせば死んでしまう結果になることも。

しばらくして胃ろうは、さらに困難を極めた。終始、牙をむき、少しでもこちらが手や腕の力を抜くものなら、手加減せず噛んだ。三人とも噛まれながら、やり通さなければならなかった。血だらけの行為であった。ほぼ毎日、誰かが血まみれになっていた。胃ろうの行為は厚手の手袋をはめてできるものではないのだ。その頃、エリザベスカラーは無用の長物になってしまっていた。患部には触れないとはいっても、四六時中、匂いや痒み、痛みなどの違和感があるのだろう、終には強度なプラスチック製のエリザベスカラーでさえ壊し、いくらか食べられてしまうことになった。決定的だったのは胃ろうのチューブまで食べてしまい、ウンチの中からその残骸がでてきたことだ。F先生の言葉を思い出した。

「このぐらいの大きさだと、野良の気質は全然ちがいますからね。もっと激しいですから」おそらく、拾いあげた頃は虚弱だったため、野良の凶暴な気質が隠れていて、それが今、顕在化したのだろうと思われた。これまで多くの犬を飼ってきたが、まるで狼の如くこれほど牙をむき出した表情は見たことがなかった。それに、まだ生後数ヵ月も満たない子犬である。

その間、M先生や、近くの動物病院で胃ろうのチューブの取り替えや、相談をした。どれも予想できる範囲のアドバイスで、これだという打開策が見つからなかった。

ある程度の覚悟はしていたものの、とくに食事の際の豹変ぶりには、三人とも疲労感とこれからの不安を募らせた。こんなことをずっとやっていくことは、とうてい無理なことであった。「まずミライちゃんなの。そうすればハッピーになれるでしょ」と何事にもミライちゃんファーストでやってきた姉でさえ、帰ってきて餌をやるのが苦痛と言いはじめた。家に帰ってくると、へとへとに疲れきった様子だった。日々、車椅子の重度の子達を持ち上げてバスに乗り降ろしするのが重労働だと言った。それからミライちゃんの世話となると、ため息を押し殺した表情が滲んでいる。

「もう、これだけ世話をしたんだから、もしミライちゃんに何があっても、脱走して外に逃げてしまっても仕方がないわよね。これだけ費用も掛けたんだし」

姉はぽつりとため息まじりに言った。

「ミライちゃんが命の危険な状態であっても病院へ連れて行かないということ？　逃げたら、追いかけずに捜さないということ？」

と、私は姉のほうを向いた。

「そうとは、はっきり言わないけど……」

「あの子だってつらいだろうな」

私がそう言うと、姉と真由美さんはそうだと言わんばかりに頷いた。

真由美さんがその日の最後の胃ろうの準備をしていると、「真由美さん、次の胃ろうは私にやらせて」と姉は言った。

「お姉さん、お疲れですから、私がやります」

「お願い。私、なんだか燃えてきたわ」

ミライをケージから持ち上げて、

「不思議ね。噛むかもしれないけど、この子にはシャイニーにはない温かさがあるわ」

と、ぎゅっと抱きしめた。

近くに出張してくれるペットシッターがいるということで、頼んでみた。ペットシッター士は、若い女性だった。アメリカの応用行動分析学に基づいた、科学的かつ人道的なトレーニングをやっているという。こちらの事情を話すと、「私も、保護犬を飼っていますから、よくわかります」と何度も頷いた。ミライちゃんに会わせてもらいますかと言って、ケージより少し離れてけっして視線を合わせないようにして座った。ミライは上目遣いでシッター士をずっと見ている。

『『近づかないで』のサインで、不安と警戒心が強いですね。あと、餌の量とカロリーを教えていただけますか？」

そして、彼女は缶詰の栄養表示欄を見て、計算しはじめた。

「ミライちゃんが、怒るのも納得です。餌の量もカロリーが全然足りませんね。半分以下です。倍やる必要があります」

「えっ、そうなんですか？　嘔吐や誤嚥性の肺炎の危険性もあったからでしょうか」

私は言った。

「そうでしょうね。リスクはありますが、少しずつ増やして、口からも与えてはどうでしょう」

その他いろいろなアドバイスを彼女から受けた。散歩もそのひとつ。ミライはまっすぐ走らない。外の世界での恐ろしさからかしゃがみこみ、そうかと思ったら逆の方向へ走り、その走り方にしても、お尻が跳ねるような、まるでキツネのような走り方である。尻尾も長いので、シェパードというよりキツネの血が入っているかと思うぐらいだ。はるか向こうから、音を引きずり二つ目の大きな物体が近づいてくる。車である。目を大きく見開き一瞬かたまるが、恐ろしさのあまり、水をはった田んぼの中に身を隠すようにどんどん入っていく。私もその勢いに負かされて、引きずりこまれてしまう羽目に。それに比べて、二匹のトイプードルのなにげない普通の散歩が、どれほど心地良いものかと実感する。

「陽の光を浴びさせ、外で運動をさせたいこともわかりますが、まずミライちゃんの嫌がることはやめときましょう。見るもの、嗅ぐもの、聞くものすべてにおいて警戒心を持っています。それよりもその子の好きなことさせてあげてください。そこから何か発見があるはずです。うちの犬も散歩は大嫌いですから」

彼女は帰る際にこうも言った。「今は大変かと思われますが、時間が経てば、笑って『ああ、あの時は大変だったなあ』と思われる時が必ず来ます。時間がかかるかもしれま

せんが、犬はこちらの気持ちを汲んでくれますから、もうすこし頑張ってください」と。

二ヵ月くらい経って、いろいろな変化があった。そのひとつが胃ろうを塞いだことだ。M先生も他の動物病院の先生も「万が一の場合、それは……」とためらわれたが、私たちは決めた。以来、ミライは口から餌を食べている。ペットシッターの指示どおりに徐々に増やし、今では二倍の餌を与えている。静かに電子レンジの扉を開け、餌を温めようとすると、三間むこうのミライが鳴きはじめる。家の中の電波状況は悪いが、ミライの感度は良好である。スマートフォンの画面上部にある棒状のグラフはいつも低レベルだが、ミライのひげはピンと高く感度はピカイチである。更にそろそろ餌の時間かなあと頭に浮かべると鳴くのである。規則的に決められた時間でやっていればわかるが、お客都合で遅れる場合もあり、常時作動している電子レンジで、お客と自分の餌との区別がわかるものかと感心してしまう。餌をやる時も、ケージ越しで高い所から与えるため、ケージの柵に両手を引っ掛けてちょうど立位の姿勢が保てた。ときおり、嘔吐し、ウゥと怒ることもある。ウンチもごろっとして、小町やシャイニーの三倍以上の大きさだ。ぐるぐる回ってウンチのでかかったところで、ケージの隅っこにおやつを上げる。おやつに気を取られている間に、すばやくウンチを取ることも考えた。成功率は六割ぐらいで、あとはミライの口に入っていく。もたもたしていると、噛まれてしまうことに。だからミライの口はいつもウンチくさい。一度、内視鏡検査でミライの食道を見せてもらったことがある。ほとんどがヘドロ状の真っ黒なものがへばりついていた。「全部、ウンチです」と先生のひと言。黒の蛇腹のダクトホースそのものだった。

ミライの体重は七kg。徐々に大きくなっているものの、お腹まわりはげそっと痩せているように見える。たくさん食べて、多くのウンチをしているが、栄養として充分に身についているかどうか疑問であった。

ケージ床に置くタオルにしても大変だった。餌を増やしていくと、ウンチも増えていく。ペットシートはすべて食べられてしまうために、タオルを代替として置くわけだが、ウンチとオシッコまみれで、一日に三十枚のタオルが必要となった。習性なのか、洗濯したタオルを入れてやると一度匂いを嗅いでしゃがんでオシッコをする。タオルの洗濯だけで一日二、三回廻した。「また、やっちゃたの！　もう、いい加減にして」ミライのところと洗濯機の間を行ったり来たりする姉がいる。でも、どこか言葉が弾んでいるように思えた。そして、タオルの端がボロボロになっていき、姉は事あるごとに、お寺の友達にタオルを貰いに走った。

次回の読書会の題材は、庄野潤三の「静物」だった。名作らしいが、むかし読んで退屈な作品だったことを覚えている。夫婦と三人の子の家庭内の事を綴ったもので、これといった事件も起こらず、物語上なにも発展していくこともなかった。しかし、この作品には妻の自殺未遂をした場面があるらしく、読み込まないとその事すらなかなか理解できなかった。隠されているというか、わざと意味と解釈は省略しているように思えたのである。

とにかく頭をニュートラルにして再読した。いくつかのエピソードが章立てで並列的に何の脈略もなく描かれていた。釣堀の場面が幾度か描かれている。淡々と書かれているだけに注意深く読みすすめた。そのなかで気になったところがあった。夫の会話で「よそ見している時にかかった金魚だ。大事に飼ってやらなくては」という箇所である。前の記述と後の記述が矛盾しているように思えた。普通であれば、どうなってもいいという後述になるはずだ。イノセントな金魚がどうして？　その後、この金魚は子供の部屋に置かれ、ボールか何かが飛んできそうなところであるが、不思議と金魚の入った鉢は割れずに、ひっくり返りもしなかったのである。そうして日が経つにつれて、以前からこの部屋にあった物と見えて来たのである。

私は、はっとした。以前からこの部屋にあったということは、まるで必然的にこの家にやってきたことが運命づけられているように思えた。真由美さんは、ミライちゃんはこの家に選ばれてやって来たのだと言った。たしかに、病気を含めれば命を三回も拾いあげているのだ。まるで金魚が、ミライのように思えてきた。よそ見している時が、まるで不意に拾った犬かのように。ミライが来て何ヵ月が経ち、いい時も悪い時も三人の人間が一人の人間になったような気分だった。ミライの未来を語るということは、三人の未来を描くようなことだとも思えた。

もうひとつ劇的な変化は、ケージに体を擦り付けて、体の隅ずみまで触らせてくれたことだ。敏感な足先や口の周りさえも触らせてくれた。ペットシッターの言う通りだった。私の手をミライの口元に持っていくと、手を口には入れるが、チラッとこちらに視線をくれて甘噛み程度に抑えているのがわかる。刺々しい寒冷前線のような歯並びが、どこか温暖前線に見えてきた。これは信頼感の表れだと思われた。半月型の白目も徐々に三日月型に変化してきている。以前では全く考えられなかった事が、ある時を境にして劇的に変わっていったのが不思議であった。私たちは少なからず感動した。

それからしばらくしてのことだ。姉が勤めに行く前、厨房に飛び込んできた。ミライがどこか血を流しているということだった。真由美さんが行ったが、どこから血がでているかがわからなかったようだ。私が行って見ると、ケージの中に血が点々としている。ミライは何事もないような素振りだった。ははーんと私はすぐ理解した。ミライは一年を迎えたのだ。

私は言った。「真由美さん、赤飯作らないと。今晩、ミライちゃんのお祝いだ」

了

（引用文献）

プールサイド小景・静物「新潮文庫」／庄野潤三より

「静物」